
螢火

田辺 颯太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

螢火

【Nコード】

N3909T

【作者名】

田辺 颯太

【あらすじ】

闇の帳が降り、人々が眠りに尽きし頃に起き出す者在りけり。ひとり、またひとりと、はぐれし者は闇に喰わるる。

闇に囚われし者たちを、此方側に戻す者ありけり。妖しものたちに魅入られし子らよ、いま、自らの刃を持って立ち向かえ。

美しき宵月に、紅の花が咲き、螢が舞い躍る。

異能集団朱天に所属する少年・螢と、お頭の陽炎。彼岸に連れ去られし一般市民を守り通す少年の痛快妖怪青春ファンタジー！国を治めることは上手いが、私生活では泣き虫の帝に、内親王でありな

がら剣士でもある桜花姫に振り回されながらも、螢、日々精進しつつ妖怪退治を頑張ってます！

第一幕

「おかあーさん」

覚えてるのは、竹林の隙間から覗く光と、むせかえるような熱気。走って飛び込んだ母の胸から薫る、名も知らぬ花の匂い。

自分は短い手足を精一杯広げて母に抱きつく。何か、とても悲しいことがあって、自分は母の元へ、家へ帰ったんだ。竹林の奥にある、少し寂れた庵だったと思う。母一人、子一人で暮らすには十分な広さをもつ庵の傍には、井戸もすっかりあって、母はそこで毎回水を汲んでいた。子どもが、走って傍にいくより先に、母は子に気づいて腰をかがめて待っていてくれた。

自分は迷わず、母の胸に抱きついて、顔を埋めた。何も言わずただ泣いている子どもを母は根気強くあやしてくれた。

「どうしたの」

何度目かの問いで、子どもは顔を上げた。

母親の顔は逆光でよく見えなかったけれど、笑顔だったと思う。

子どもは何かを必死に話している。

どのくらい経ったのだろうか。そんなに経っていないようにも思う。急に母親が子を抱えて庵へと走った。

「……螢^{ほたる}！ー！」

甲高い悲鳴が竹林に木霊^{こだま}する。

生ぬるい液体が、体を覆う。熱気と、むせかえるような、鉄の匂い。

「おかあ……さん？」

自分に覆い被さる母の体はずしりと重く、どかそうとしてもどけることができない。やっとで顔をあげることが出来たときに、奴と目があつた。

鋭い眼光に大きな牙。口から血を滴らせ、此方を威嚇すように、背にある大きな翼を開け閉めしている。虎よりも大きな軀を揺らし、庵の中へと入ってこようとするのを、子どもは震えながら見ている。

「おかあさ・・・おかあさああん」

先程から指一つ動かぬ母の、徐徐に冷たくなっていく肢体を支えながら、子どもは迫りくる化け物を見ていることしか出来なかった。

庵が大きく揺れ、梁が落ちて化け物が咆吼する。

朱色の水溜まりに身を浸しながら見たのは、美しい紅の焰だった。

「おい、螢。さつさと起きな。今日が何の日か話しただろう」

「何の日だったけ・・・？」

まだ明け切らぬ目を擦りながら、茵から這い出てきたのは、まだ幼さの抜けきらぬ少年。単衣を身に纏い、肩より下に流れる髪は漆黒。閉じた瞼より、現れし瞳は・・・世にも珍しき朱色。左目下に在る紅の三つの斑点は、まるで蓮の花の蕾のよう。

緩慢な仕草で起きあがる少年、螢の頭上に勢いよく拳骨が振り落とされた。

「いったつつついだろ！」

「今日は、帝との顔合わせの日だろう！大馬鹿者！腑抜け！糟！屑！」

罵詈雑言を述べ、更に回し蹴りを繰り出すは、目を惹く朱色の着流しを纏いし女人。朱い簪を頭の天辺に挿し、腰には太刀と小太刀を差している。化粧の施された美しい顔に、赤い口紅がにいと笑う。

「な・・・陽炎！そこまで言わなくてもいいだろう・・・全く、朝っぱらから煩いな・・・」

「ああン？聞こえてンだぞ、糞餓鬼」

太刀に手をかけ間合いをとる女人を斜に構えながら、溜息を吐く少年。

「・・・年増ババア」

小声でぼそりと少年が呟いた声は、しっかりと女性の耳が拾ったらしい。

朝陽が昇り、人々が朝餉^{あさげ}を頂く頃に、女人の野太い怒声が響き渡った。

「螢、準備は出来たかい」

「・・・出来たよ」

女性にしては低めの声に、まだ声変わりしきれていない少し掠れた声が答えを返す。邸から出てきたのは、髪を後ろに高い位置で結った少年だ。単衣ではなく、黒い袴^{はかま}に黒い着物を着て、陽炎と同じ朱色の羽織^{はおり}を着ている。

「お、ちゃんと正装してきたな」

螢は、偉い偉いと頭を撫で回す手をはね除けて、先へ進む。

「帝に会いに行くんだろ！さっさと行こう」

先へ進む螢の背を追いながら、陽炎は笠を被る。

「螢、今日は日差しが強いから笠被っていきな」

「・・・ありがとう」

追いついて笠を渡すと、素直に礼を言う螢の横に並び歩く陽炎は、彼より頭一つ分大きい。というのも、陽炎が平均の女性より背が高いいだけで、決して螢が低いわけではない。

「なあ、何で俺、帝と顔合わせしなきゃなんねえの。何かした？」

「ばあか。お前、お偉いさんと顔合わせるって言ったら全部そう言うよな」

くつくつと笑うと陽炎は横でむくれている螢の、少しずれている笠を直してやる。

「・・・私^{あたし}たちの社会的立場を作ってくれた方だ。悪い方じゃない

よ。ただ、元服を迎えた餓鬼の顔を見てえただけだよ」

「本当かよ」

胡散臭そうに顔を顰める螢に、「本当本当」と軽く言つてのけると陽炎は、細道から大通りへと出る。

行き交う人々の活気に乗せられるように、徐徐に明るくなつてくる横顔を見ながら、陽炎は溜息を吐いた。

「螢、あんまり顔を出しすぎるんじゃないよ」

「・・・わかつてるよ」

なるべく顔を出さないように辺りを見渡していた螢だが、陽炎の指摘に慌てて笠を深く被った。行き交う人々は、帝のおわす天城に近づくにつれ、多くなる。

城下には多くの店もあり、町人たちが起き出して早速店を開けはじめている。

「明るい城下は始めてだなあ」

人々を眩しそうに眺める螢の肩たたき、陽炎は近くを通つた茶屋で団子を買つた。

「螢、朝餉満足に食べてねえだろ。団子でも食え」

「時間ないんじゃないの」

「ああ、誰かさんのお陰でな」

鼻で笑う陽炎を軽く睨みながら、螢は渡された団子にかじりつく

「・・・まあ、団子を食う時間ぐらいならあるさ。焦らずゆっくり・・・ああゆっくりは食うな」

ゆっくり、と言つた時点で、酷く緩慢に団子を嚙んでいた螢だが、陽炎の注意に、少し租借するのを早くする。

「うつまい。全部食べて良いのか？」

「うん？ああ、全部食べて・・・でもう全部食べてるじゃないか！」

二十本あつたはずの、あんこがかけてあつた団子は今や寒々しい串を残すのみ。もともと全て螢に食べさすつもりではあつたが、こつも遠慮無く早々と食べられると、何故か腹が立ってきた。

「くっそ！あ、お姉ちゃん、団子あと十本もつてきて！」

奥にいる店の看板娘に追加を頼むと、陽炎は横にいる螢の頭を笠ごと殴る。

「いつてえ・・・つうか、帝から招請されてんだから、早めに参内さんだいしなくちゃいけないんじゃないのかよ・・・」

「煩い。黙れ。腹が減つては戦いくさは出来ぬぞ」

「あれ、俺たち参内するんだよな。戦に行く訳じゃないよな？」

鼻息荒く団子を待つ陽炎はとても妙齡の女性には見えない。

「ていうか今年四十のババアが一々食べ物で意地張るなよな」

「ああン？なんだって？」

「いいえ、何でもないですよ」

程なくして看板娘が団子を運んできてくれるのを、陽炎は嫌になるぐらい螢に食べるなと念押ししてから、食べ始めた。

「一々言わなくても食べないよ・・・」

ここまで念押しされれば食べる気は失せるし、さつき二十本食べたか元々腹も空いていない。

美味しそうに団子をほおばる陽炎を横に見ながら螢は、笠を被りなおした。

「広いなあ・・・」

「・・・そついやここまで来たの初めてだったか」

無駄にでかいよなーと暢気に喋りながら前に行く陽炎の後ろをついていきながら、螢は辺りを見渡す。門番だろうか。槍や刀を持った武士が左右に三人ずつ配置され、中へ入る者を検分している。

「よう、元気でやってるか」

「おや、陽炎か。久しいな」

陽炎が身元あらたを検めている武士に声をかけると、無愛想に話していた敵いかついでに面おもてが和らぐ。

「相変わらず怖い顔するなあ、親父さんは」

「そつかあ？」

「怒ってるように見えるよ」

眉を下げ、困ったように頭をかく様は、人相を覗けば普通に何処にでも良そうな親父さんだ。ただ、泣く子も黙るほど恐ろしい凶悪な人相な分、穏やかな語り口との落差が激しい。

螢が一步引いて陽炎と、親父さんの会話を聞いていると、思いだしたように、いや実際今螢の存在に気づいたのだろう。陽炎が螢を手招きする。

「親父さん。こいつは、私の弟子の螢だよ。螢、こちらの方は、帝このえの近衛隊長でもある、吉本賢三郎殿だ。挨拶しな」

「はじめまして、螢と申します」

笠を被ったままでは失礼だろうと思うが、笠を被ったまま螢は挨拶する。吉本は螢をしばらく凝視した後、満面の笑みを浮かべた。

「なるほどなア・・・この子が、螢君かい」

「ああ、そうだよ」

意味深に笑みを浮かべる陽炎の脇腹をつつくも、陽炎は何も答えず、ただ、吉本と笑っているだけだった。

「螢君、儂のことは・・・」

「賢爺、だろ」

にやつと笑って陽炎が付け足す。吉本は大口を開けて、「そうだな、それでいい」と笑った。

笑っても、正直右目にある大きな切り傷のせいもあって恐ろしかったが、瞳がとても優しい目だったので、螢は安心して笑むことが出来た。

「これからよろしくお願いします、賢爺」

「見事な外面だな」

「煩い！」

「おいおい、それが師匠に対する口の利き方か」

呆れたように、螢の額をはじく陽炎の手を振り払いながらも睨み付けることも忘れない。そんな反応を陽炎がおもしろがってさらにからかっていることには考えつかずに煽りに乗る螢を賢爺だけでな

く他の武士達も見ている。

「は？誰が師匠なんだよ」

「目の前にこんな綺麗で優しい師匠を持っておきながら・・・」

「綺麗？優しい？え・・・何処にいんの」

わざとらしく辺りを見渡す螢の頭を笠ごと殴りつけようとするのを、成り行きを見守っていた賢爺が間に入る。

「おいおい二人とも、ほら、今日は何か用事があって来たんだろう。早くいなくて大丈夫なのかい」

「あ・・・陽炎、時間大丈夫なのか」

はたと気づいて螢は、陽炎を見る。すると、滅多にないくらい爽やかな顔で続けられた台詞は、螢が絶叫するのも無理からぬ内容だった。

「ああ、大丈夫さ。もう約束の時間には遅れてるから」

「・・・は？」

賢爺と螢の声が重なってしまったのも無理はない。

「うん？聞こえなかったのか、二人とも。だから約束の時間には・・・」

「いやいや、ちょっと待て。今日は俺、お偉いさんとの顔合わせなんだよな？」

「おう。帝だ」

「帝・・・との、謁見の、約束の時間は・・・」

恐る恐るといった体で聞き出す螢に、これまた気持ちいいくらいの爽やかな声で陽炎が答える。

「八時だよ」

「さっき・・・九時の鐘鳴ってなかったけ、賢爺」

「ああ、鳴ってたな。ついさっきな」

「まあ、一時間だ、たいしたことねえよ」

「たいしたことあるよ！何考えてんだよ！それでも朱天の頭領かよ！」

「ああン？小さいことで騒ぐンじゃねえよ」

「ち・い・さ・い・こ・と？」

声を荒げて詰め寄る螢を押し戻しながら、陽炎は緊張感の無い顔でしれっと答える。

「元々、九時過ぎからじゃねえと、帝にも朝議っていう大事な勤めがあるんだよ」

「でも、約束してたんだろ？」

「ああ、大丈夫。いつものことだから」

「は？」

何がいつものことなんだ。帝の招請の時間を違えることはいつものことなのだろう。いつものことなのら問題ないのか。いやまてまて、問題は大ありだろう。帝っていつたらこの国の頂点におわす人で、生き神みたいなもんなんだろ。なのに、帝の招請即ち勅命の時間に背くことは、やはり大問題で・・・そもそも何で団子、あ、団子だ！団子のせいだ！あそこでまったり団子なんか食べたから・・・！

「螢君、おーい、聞こえてるか」

「おい、螢！なんだよ頭だけでなく、とうとう耳までおかしくなったのか」

「・・・おかしくなんか・・・ああ今あなたの所為でおかしくなりそうだよ！きつと厳罰が下る・・・！」

帝の勅命に背けば死罪・・・遅刻だから死罪とは行かないまでも、確実に罰は下る。と戦々恐々としていた螢だが、賢爺に背中を叩かれて我に返った。

「螢君、帝は寛大な方だ。むしろ今日の朝議はいつもより長かったから、遅れてきてきたことに返って安心しとるだろうよ」

「・・・朝議はいつ終わったんだ？」

「お前さんたちが来るほんの少し前じゃな。左大臣の馬車が邸に戻っていきよった」

「そつかい、なら丁度だな」

「ああ、陽炎も大変だなあ。帝の幼馴染みをやってくのは」

さらに衝撃な事実には螢は、ここが門前だということも忘れて絶叫した。

「え、帝と陽炎って幼馴染みの！？」

「ああ、螢君は知らんのか」

結構有名だぞと笑う賢爺、厳つい顔だが声は低く聞き取りやすい上に何処か優しい、背の高い近衛隊長の顔をじっと見上げて螢は息を呑んだ。

「知らなかった！なんで陽炎はもっと早くに教えてくれねえの！」

「うるせえ！関係ねえだろ！ほら、さっさと行くぞ」

足音高く門をくぐり、先へと進む陽炎の後を慌てて追いながら、螢はまだ見ぬ帝がどんな人物なのかと想像して、まったく想像がつかなかったので諦めて黙々と歩いた。

第二幕

何故だろう。

心中で呟く声を聞いている者なんて居ないだろうが、螢はもう一度呟いた。

何なんだ、この状況は。

ほんの三十分前に螢と陽炎は帝との拝謁はいえつを許され、礼に則り挨拶を述べた後、帝は従者全員を下がらせた。

不思議に思いながらも、声がかかるまで頭を上げてはいけないで、合手礼ごうしゅれいを徹していると、帝より直々に声がかかった。

「螢よ・・・此度の元服げんぷく、真まことに目出度きこと。面をあげよ」

「はい・・・」

「これから、朱天の一員として、民のために精進をしてくれ。期待している」

「・・・恐悦至極に存知ます」

普段使わない言葉で言うため螢は何度か、言い間違えそうになったが、何とか噛まずに言うことが出来て安心していたところに、帝から再び声がかかる。

「大きくなったものだ・・・」

くつくつと笑う声が御簾越しに聞こえるも、螢には何のことかわからない。

「覚えておらぬか、無理もないか。あのとき其方は五歳だったからな」

内心首をひねっていると、先程まで不気味なほど喋らなかった陽炎が口を開いた。

「覚えてるわけないだろ。こいつはまだ右も左も分からないときだったんだからな」

「だが一年程逢瀬おつせを重ねていたのに覚えておらぬとは酷いではないか」

「逢瀬とか気持ち悪い言い方するなよ、螢が引いてるぞ」

「なに！？私に惹かれたか！？ふ・・・無理もないな」

「惹いたじゃねえよ、引いただよ！気持ち悪いな！」

陽炎は呆れたように首を振ると螢に向き直った。

「螢、あん？なんだよ。しけた面つらして」

「い、いや、帝だよ、陽炎。そんな」

言葉使いでいいのかと問おうとした言葉は、陽炎の大笑いで呑み込んだ。

「こいつに畏まる必要は、今はねえよ。なあ、帝様」

そう声をかけたのと同時に御簾が動く。

「螢、今はそんなに畏まる必要はないぞ、人払いもしてあるからな」
そう言って御簾より出てきたのは、髪を頂うなじで一つに結んだ美丈夫だった。

「うん？どうした、螢」

不思議そうにこちらを見る帝に口も聞けなくなるほど、螢は驚いていた。帝が意外と美丈夫だったことに驚いているわけではない。ただ、その顔にももの凄く覚えがあったからだ。まだ、螢が都に来て間もない頃、五歳だったときだ。いろいろなことがありすぎて混乱し、流されるがまま、陽炎の家で暮らしていたときに、昼頃ひよっこり陽炎の家に来ては、螢にお菓子や読み物をくれたり、文字を教えてくれた人と、そっくりだったからだ。

今から十一年前の事を思いだして、混乱している螢を見て、陽炎は分かったのか意地の悪い顔で此方を眺めている。

「も、もしかして、ハル兄ちゃん・・・？」

確かめるため、無礼も忘れて聞くと、帝はにっこりと笑って肯定した。

「やっとで思いだしてくれたか！螢！」

嬉しそうに抱きつく帝はもはや先程の、神々しく威厳に満ちた雰囲気ははじけ飛び、十一年前の、どこかほわほわとしたハル兄ちゃんに戻っていた。

「おい、帝。螢が窒息する、止める」

「おお、すまない螢。つい、嬉しくてな！わが息子よ！」

「違うだろ」

「弟よ！」

「勝手に弟にすんなよ」

「……感動の再会に水を差すな！陽炎！」

「……本当にハル兄ちゃんなのか……」

「ああ、あのハルだ」

確認するように陽炎を見ると、爽やかな笑顔で肯うなずかれた。

「うえええ！？ハル兄ちゃん！？だってハル兄ちゃんだよ！？」

臆気ながらもハル兄ちゃんといえば、陽炎に叱られてべそかいた螢を抱っこして慰めてくれたり、博識でいろんなこと教えてくれたかっこいいのに、何故か蠅はえや蚊か以外の全ての昆虫、は虫類が駄目で、体に付こうものなら半泣きで螢に捕ってくれと懇願するような、それで陽炎に呆られて叱られ、さらに半泣きになるような男ひとのことだ。

あの、情けないハル兄ちゃんが帝だったのか！と驚き戦おののいている螢の肩を叩き陽炎が現実に戻す。

「螢、螢。全部口から出てる」

「え？」

ふと前を向けば、結構心にきたらしい帝もとい、ハル兄ちゃんが畳みに突っ伏していた。

「あ、ハルにいちや……」

なんだろう、この罪悪感。

畳と仲良くなっているハル兄ちゃんの傍は、茸きのこでも生えそうなほど湿っている。

何故こんなことになった。

ただ、昔を思いだしてただけじゃないかと思うも、本人が思い出してほしかったのは別のことだったらしい。

「他に・・・思い出すことは？」

「え？えーと、ハル兄ちゃんと遊んでたら、草むらから飛蝗ばったが出てきて、兄ちゃんが俺おいて先に家帰ったこととか・・・？」

「最っ低だよな。先に帰ってきたお前を私が外に追い出したら、螢も半泣きで帰ってきてたっけ」

「あれ？そうだった？」

「迷子になったか、捨てられたとでも思ったんじゃない？」

「・・・他にはないの、螢」

ハル兄ちゃんはまだ畳みと仲が良いままだ。

「えっと・・・字を教えて貰ってたら」

「うんうん。字教えてたもんね」

「天井から亀虫カメムシが文机に落ちてきて、ハル兄ちゃんが失神したとか？」

「・・・」

「・・・なっさつけねえな、ハル」

「・・・あれは、未だに夢に出る」

「はっ・・・」

「・・・ハル兄ちゃん？た、大したことないよ。誰だって虫は苦手だと思うよ」

どういえば、この暗く沈んだ空気を打開できるのだろうか、昔はどうやって慰めていただろうか、必死に思い出そうしていると陽炎がふらりと立ち上がった。

「おい、春光こうせい、何か肩についてるぞ」

「え・・・？なに？」

さめざめと思ひ出を畳みに語らっていた帝が、緩慢な動作で首を動かす。螢も何が付いているのかと肩を見ると、蝶の幼虫だろうか、

青い幼虫が帝の肩で小さくひっそり・・・体を大きくうねらせて肩から胸へと移動しようとしていた。しかし、よくよく見るとこれが幻影だと螢は直ぐに気づいた。螢は幻影を使っていない、とするとこの中で幻影を扱うことの出来る者なんて限られてくる。ちらりと陽炎を見ると、思いつきり睨まれた。鋭い視線に、螢の心は瞬時に凍り付いたが、同じように、虫に凍り付いた者がいた。

「あ、あ、あ、あああああああああああああああ」

「あ、ハルにちゃん」

幻影だから大丈夫だよと言おうとしたのも矢先、素晴らしいほど引きつり裏返った悲鳴が室内に響いた。これと同時に陽炎が、外に音を漏れさせないためか結界まで張っていた。作業の早さに驚くも、螢は帝を見ると、大の男が泣きながら服の上をはい回る幼虫をどうにかたたき落とそうと必死になって暴れている。終いには、腰に帯びてあった、美しい装飾の施された漆黒の鞘から、輝く刀身を抜き出し、自分の体をはいずり回る青虫に振り下ろす、つまり自分自身に向けて刀を突き刺そうとした。

流石にこれには陽炎も驚いたように目を見張ったが、螢は直ぐに飛び出し、帝の手をたたいて刀を落とし、幻影の術を無理矢理、自分の、青虫はいないという術で相殺し、消す。

「お、おお・・・すごいな螢」

帝は暫く何が起こったのか理解できなかったようだが、すぐにありがとうと半泣き笑顔で抱きついてきた。

「はああああ」

螢は本日何度目になるかわからない溜息を吐いた。

じつとりと汗が体を伝うのにも構わず、薄汚い檻襦ほろを身につけた男は、目の前に投げ出された四肢を抱き上げる。

手にべったりと付く血にも構わず男は悲嘆の表情で「違つ」と

眩く。

「違う、違う違うちがう」

あいつはこんなに不細工ではなかった。

「ちがう」

こんなすえた臭いもしない。なんだが、いい匂いがいつも香っていた。

「明日香」

愛しい女の名を舌に転がす。

体中が熱くなり、男の頭は真っ白になった。げっそりと殺がれた頬に喜色を浮かべて男は壊れたように繰り返す。

「明日香、明日香、あすか、あすか」

そうだ。

これは、材料が悪かったのだ。

もつと、もつと器量の良い娘を調達せねばならぬ。

男は言葉にならぬ声を上げて、抱きしめていた女を投げ捨て、持っていた鎌で手足を切り取る。五六回切つてようやくとれた腕を持つて男は「明日香」ともう一度眩く。

早く、早くしないと、約束の刻限に遅れてしまう。

もつと、色が白くて。

もつと、鼻梁の高い。

もつと、髪が黒い女を探さないと。

「あすか・・・待っているよ・・・」

くくつと漏れ出る嗤いを押し殺し男は、その後の作業に没頭した。

「おい螢、そっちはどうだった」

「何もないよ」

人々が寝静まった夜更けに歩き回る者たちがいる。

闇に乗じて蠢く魑魅魍魎の類を、制す者達がいる。

倭国の都、暁都は大きく五つの地区に別れている。一つは城を中心とする区域、通称、中央区があり、その周りを囲むように、東・西・南・北に別れて、北区・別称玄武、西区・白虎、南区・朱雀、東区・青龍で分かれている。

各区には、それぞれに不正を取り締まる組織がある。

腰には各々の武器を持って、悪事をはたらく者を取り締まる役割を持ったのが、四天と呼ばれる組織だ。

四天は、五区を守る。北区は黒天、西区は白天、南区が朱天、東区が青天が守り、中央区は四天が交代で守護する。

四天は、朝・昼・晩の三交代で区内の見回りを行う。その際に、失せ物探索から殺人まで幅広く取り扱い、町の治安を維持する役目を担う。

今日、螢は昼に帝との顔合わせを済ませた後、家（といっても集合住宅の長屋なのだが）に帰った後、夕方の六時まで睡眠をとった。螢はこの日、夜勤の担当者だったのだ。

螢は心持ち早足で、先輩の元へ行った。

「日野さん、そっちはどうでしたか」

「特にないな」

にかつと笑う日野の額には大きな傷跡がある。傷跡のせいで自分の子どもに怖がられる始末だと幼かった螢に話してくれた日野はもう五十代。朱天のなかでは一番の古株だ。

「おい、日野さん、螢」

日野達のすぐ後ろから二人、商店の集まる大通りから出てくる。駆けてくるのは、着物を着崩し、かろうじて朱色の羽織をひっかけた小柄な男と、愛想のいい笑顔で、背の高い男が後ろから歩いてきた。

「おう、永太と喜之介かい。そっちは大事ないか」

「何事もないっすよ」

駆けてきた方が永太、初めに声をかけた笑顔の青年が喜之介だ。
「何事もないのなら上々だな」

「そうですね・・・このまま何事もなく夜が明けるといいですね」

おつとりと得む喜之介の言葉に三人とも肯き、空を見上げた。

「今夜は新月・・・」

ぼつりと呟いたのは誰だったか。煌々と闇を照らす月が雲に隠れるのを見ていた一同は、瞬時に東側に走り出した。

「妖気・・・」

螢は、先に行く先輩達の後ろを走りながら、徐々に濃くなる妖気を探りながら腰に下げている刀に手を添える。

「・・・大物だな」

永太に肯き日野は十字になった路地で止まる。

「二手に分かれる。永太と喜之介は右から行つて奴の後ろに回れ」

「了解」

了承して去っていく二人の後ろを見送る螢の背中を日野が押す。

「俺たちはこのままつつこむぞ」

「はい」

狭い小径こみちを駆け抜け、一気に妖気の濃い東へと進む。

雲に隠れた月が再び、顔を出したとき、螢たちは目的地に着いていた。

「こいつぁ、でけえな」

日野はふつと笑うと懷から出してあつた得物を上空で羽ばたく、大きな妖鳥に向けて投げる。

螢は、日野が小刀を投げたのと同時に地を蹴った。螢は、日野の投げた小刀を払い落とそうとする妖鳥の脇をすり抜け、奥にいる大蛇の方へ駆けた。

「日野さん！」

大蛇の横から永太が飛び出て、懷から鎖の先に錘おもりの着いた得物を取り出し妖鳥の翼を絡め取るのを確認しつつ、螢は大蛇に腰に差した刀を向けた。

大蛇は巨体をくねらせ螢に向かい大きな口をあける。口からは涎よだれがしたたり落ちて、新月に照らされた巨軀きよくは、十尺を越える。

「螢」

「喜之介さん」

「私が、動きを封じるから・・・よろしくね」

「はい」

喜之介は螢より一步下がったところで、親指と人差し指で輪を作り、口元まで持っていき、ふう、と息を吹いた。すると、輪から炎が吹き出し、地を舐めるように大蛇を囲った。大蛇は炎の輪から抜け出そうとするも、熱くて身動きの取れぬまま、大きく唸り声をあげた。

「螢、頼んだよ」

炎で温い風が頬を伝う。螢は呼吸を整え、大蛇まで一気に走った。
「今、楽にしてやる」

刀を両手で持ち、螢は大きく横に斬り、胴体を切り離れた。大蛇は傾いだかと思うと、そのまま地に伏したのを、炎が焼き尽くす。

「よし、みんなご苦労さん」

声に振り向くと、日野と永太が立っていた。二人とも怪我無く、少し衣服が乱れているだけだ。二人の後ろには妖鳥が喜之介の出した炎で灰も遺らず燃やしている所だった。

「螢にも、怪我はないようだな」

「大丈夫ですよ」

「くつつくつ・・・螢、別に俺にはお頭みてえに砕けた態度でいいんだぜ」

「なっ！陽炎と日野さんは全然違います！」

「・・・俺にはお頭の方が怖いけどなあ。なあ、喜の」

「そうですねえ・・・私にはどっちもどっちのような気がしますけど・・・」

「全然違うじゃないか！日野さんの方がよっぽど・・・」

「よっぽど？」

「よっぽど・・・なんか変じゃねえ？」

「うーん？」

「なんか、まだ妖気が消えてない・・・」

「はあ？もう妖気なんてねえよ、なあ、日野さん。ないっすよね？」

「ああ、俺もないように思うが・・・どうだ喜之介」

「私も感じませんね・・・」

「・・・気のせいかな」

もう一度、辺りを探ってみるけれど、先程まで感じていた妖気は、何処にもなかった。

気のせいかと頭をひねる螢を他所に、日野たちはもう一度見回りをしようと話あっている。

「螢ーいくぞぉー」

「あ、ちよつと待ってよ、永太」

先へ行く永太の後を追いかけて、螢は大蛇のいた場所を振り返る。新月に照らされ、うつすらと見えるのは、焦げた地の跡のみで、別段かわった様子はない。

「気のせい・・・か」

「螢ー」

「今行くって！」

朱色の衣をはためかせ、巡回に戻る螢の姿を闇夜に紛れてひっそりと見る者がいた。

ぽっかりと闇夜に浮かぶ白い面。生者ではとうていあり得ないほど、青白い面は、巡回に戻る螢の背を見送った後、すうっと闇に消えた。

第三幕（壱）

日差しが中天に差し掛かり、猫が道の端で居眠りをし始めた頃、目深に笠を被り、この陽気にまるで喪服のように黒一色を身に纏った者がいた。

白昼の往来を人混みを縫って歩く様は、まるで影の様。すれ違う者が横目で必ず見るぐらいには注目された。何より目に付くのは二本差し。皆一様に武家か？と考えるも、武家で誰かが亡くなり喪に服しているという話は聞いたことがない。といつても、噂になるのは上級からよくて中級の武家。下級、足軽程度の武士だろうか、と皆が邪推している中、影は穏やかに歩いている。まるで散歩でもしているかのような。

影、こと螢は、先日陽炎と団子を食べた店を探しに来ていた。今日の朝、夜勤が終わり、眠ったのだが昼に空腹で目が覚めてしまった。どうせなら、先日陽炎と食べた団子が食べたいなあ、散歩するのもいいなあ、と思い立ち重い腰を上げたのだ。

「どこら辺だったかなあ・・・大通りをずっと歩いてたはずだけど・・・」

辺りを見渡すも、周りを注視しながら歩いてたわけではなかった。で、螢はとりあえず真っ直ぐ進むことにした。

人混みをくぐりぬけ進み続けると、ようやく団子屋と書かれた青地の暖簾のれんを見つけることが出来た。

「やった・・・」

知らず顔を綻ばせ、さあ、いざ暖簾をくぐろうとしたときに、通りから悲鳴があがった。

「きゃあああああ！」

甲高い悲鳴に振り返ると、女性が一人倒れ、横に子どもが横たわっていた。

「おい、小僧。もう一度言ってみろ。」

子ども達と相對するように立っているのは二本差しをつけた武士。顔は赤く歪み、喋る度に唾をまき散らす様はひどく見苦しい。對する子どもは、恐怖のせいか青白い顔をしながらも、果敢に武士に啖呵をきる。

「はっ・・・女の人に三人で囲むようなやつは武士じゃなくて糞だつていつてんだよ！」

「貴様：餓鬼とて容赦はせぬぞ」

ゆらりと真ん中に立っていた武士が刀を抜く。

周りから悲鳴が上がると同時に螢が抜刀しようと腰元に手を添えるその時。

「貴様：これは何の真似だ」

武士の得物が倒れた少年の胸に降り下ろされる刹那、間に割ってはいる者がいた。

三つ編みの長い黒髪が空に翻る。少年の胸を袈裟懸けにするはずだった刀は、両者の間に入った闖入者の刀に遮られていた。

「見るに耐えなかった故、止めたまで」

闖入者は、ふつと微笑し武士の刀を薙ぎ払うと自分の腰に刀を戻し、手を添える。

「今上の帝も、將軍も、私利私欲の為刀を抜くことを固く禁じておるぞ。例え今のことを、此の場にいる者たちが言わずとも：時機に四天が来る。：貴殿はどの様に説明なされるおつもりか」

目を細めて言葉に詰まる武士達を眺める闖入者は長い三つ編みを肩から払い、まだ幼さの残る面差しを和らげ、呆然と成り行きを見守っていた女性と子どもに手をさしのべる。

螢はほつと息を着くと、懷に仕舞ってあった朱天の羽織を着ると、人混みを掻き分けて武士の後ろに進み出る。螢の羽織を見て、見物

人達が道を譲ってくれたお陰で、楽に武士の背後に回ることが出来た。

「これは一体何の騒ぎだ？」

喚き散らしていた武士三人は、後ろに立つ螢の羽織を見て、驚愕の表情からすぐに青白い顔で下がる。

「………嘘だろ、朱天！」

「……全て見ていたぞ。詳しい話は場所を改めて聞こうか。それにしても最近の武士は余程暇らしいな」

青白い顔で口を開け閉めしている中心に居る武士を一瞥すると、螢は後ろで此方の様子をうかがっている少年と、女性とその横に立つ中性的な顔を見る。

「……申し訳ないが、同行してもらって構わないだろうか」

「あ……はい」

女性の気の抜けたような返事の後、見物していた周りの者からの口笛や拍手がわき起こり、野次が飛び交う中、武士達は悔しそうに唇をかみしめていた。

武士の三人が途中で逃げたりしないように、自分で見張りながら、応援がくるのを待つこと数分。呼びに行ってくれた商人が駆け足で店先まで戻ってきた。後ろからは、笠を被った朱色の羽織を着た者が二人、着いてきてる。

「遅い」

「あれ？もしかして螢かい？」

「……日野さん？今日夜勤明けじゃ……」

現れた朱天は、今日の朝まで共に仕事をしていた日野だった。日野も螢がいることに驚き、大げさに体を反らす。

「そりゃこつちの台詞よオ。おめエ、いくら若いからってちゃんと休まねえと体に毒だぜ」

「俺は、少し散歩をしてただけですよ。それよりも……」

「ああ。おい、雀^{すずめ}。早く縄にかけちまいな」

「へい」

後ろで影のように日野にひっそりとなっていた雀は、返事をする
と、慣れた手つきで武士達に縄をかけていく。武士達は文句を言
おうと口を開くも、雀の鋭い眼光に負け、渋々といった体で縄にか
かる。

「で、螢^{けい}。何があった？」

「はい。本日正午にてその武士三名、尾北、佐井、吉野が、勤務
中に抜けだし街を徘徊していたところ、この茶屋の娘葉奈に、暫く
つきあえだの何だのとくだらないちよつかいを出し、嫌だと抵抗し
た葉奈を無理に引っ張って行こうと為た所を、隣の呉服屋の息子、
笙之介が助けようとしたのを、この武士達が斬って捨てようとし
たんです。」

一息に、自分が知っていることを言い終わると、日野が嘆息した。

「螢^{けい}、いろいろと私情が交じっていねえか」

「そんなことないですよ。ただ、お腹空いたから団子食べたいなあ
ゝて散歩したら、目の前で抜刀騒ぎに出くわすだろ。今日は厄日
だ、めんどくさい」

「まあ・・・お前が見つけたんだからお前が最後まで、この件担当
しねえとな」

めんどくせえのはわかるけどな、ともう一度嘆息する日野は、行
儀良く葉奈と笙之介の隣に座る人物に目をとめる。

「で、お前さんは？」

「ああ、この人は・・・抜刀した武士を抑えてくれた人ですよ」

「・・・当然のことをしたまです」

謙虚に首をふる、まだ幼さの残る横顔を見つめて、そういえば名
前聞くのを忘れてたと今更思い出す。

「名前は？」

日野が聞くと、「申し遅れました、さくらと申します」とゆるり
と微笑んだ。さくら、と頭の中で読んで、女の子みたいな名前だな

と思った螢は、そこで勢いよくさくらを見つめた。

「……………女の子？」

「……………はい？」

首を傾げると、はらりと黒髪が頬にかかる。中性的な顔立ちのためか、男と言われれば男に見えるし、女と言われれば、女に見える。しかし、身につけているものは、袴だ。女性が着る着物ではない。女の剣士というのは居ない訳ではないが、珍しいし、見たところ螢と同じ年ぐらいだろう。

驚いたのは、螢だけではないらしい。さくらに助けられた女性、葉奈も、笙之介も驚いている。

「え？女の子だったの？」

「うそ、お姉ちゃん超強いな！」

目を輝かせて身を乗り出す笙之介に少し、辟易しながら、「私は全然強くないです」と微笑む。

何より驚いたのは武士達だろう。尾北もさくらを凝視している。それも当然だろう。その腰に下げているもので、生計を立てているのに、失礼だが女子どもに舌と刀で負かされたのだから。

「しかし、どうりで華奢だと思ったよ。螢より華奢だからな」

ふっと笑う日野は、螢の肩を数回叩き、「さて」と騒がしい一同を見渡した。

「とりあえず、お前さんたちには、一度我々と共に来て貰うが、構わないだろうか。勿論、さくら殿も」

「はい」

「よし、螢、お前は後ろ、雀は尾北達を頼む」

「諒解」

団子を食べ損ねたことで、空腹が歩く度、存在を訴えかけてきて、少し苛々してきた螢。寝不足の独特の倦怠感も手伝ってか、朱天の拠点となる建物、朱雀殿の、朱色の門が見えた頃には、ほとほと疲れ果てていた。

「螢、お前奥で休んでろ、取り調べは俺たちでするから」

からりと笑う日野は疲れを感じさせない足取りで、門番をしている朱天の団員に挨拶をする。

「大丈夫です、出来ます」

「そんなひよこみたいな足取りで何が、大丈夫だ。体資本なんたら無理すんじゃないえ」

螢の主張を一蹴すると日野は雀に指示を出し、尾北と佐井と吉野を取り調べ室にそれぞれ連行していく。

「日野さん、俺が自分で・・・」

「ああー。そんじゃあさくら殿達を応接室に通して茶でも出してやれ。で、お前さんは寝ろ。わかったな？」

有無を言わせぬ口調でそれだけ言ってしまうと、日野は雀の後追う。

残された螢は、釈然としないまま、さくら達を言われた通り案内するのだった。

第三幕（貳）

後ろを振り向くと、子どもが目を輝かせて此方を見ていることに気づく。

「すごいなあ、お兄ちゃんは何歳？」

「十六歳。笙之介は？」

「俺は十歳！　すごいなあ、朱天にまさか兄ちゃんみたいなのがいるなんて」

「なんか、あんまり嬉しくないな……」

「いや、兄ちゃんみたな子どもがいるなんて思わないだろ！　普通！」

「笙之介よりは子どもじゃないけどね」

応接室に案内してから笙之介の矢継ぎ早にくる質問に答えていた螢は、そろそろ体がだるくなってきた、少しうんざりしていた。しかし、朱天に憧れる民は多く、こうも楽しそうに聞かれるとついつい丁寧に答えてやりたくなる。

「兄ちゃんは、何歳から朱天に入ったの？」

「……君の年にはもう、仕事に参加させてもらってたよ」

「そうなの！？　すごい！　かっこいい！」

「……そ、そうかな」

詰め寄ってくる笙之介を押し戻していると、くすくすと笑い声が聞こえたので前を見ると、正面に座っているさくらと葉奈が顔を見合わせて笑っていた。

さくらと葉奈は、初めこそ緊張していたが、応接室で完全に寛いでいる笙之介を見て、少しずつだが緊張がとけていった様だ。笑っているさくらと葉奈をぼんやりと眺めていると、視線に気づいた葉奈が螢の顔を見てまた、堪えきれなくなったように微笑んだ。

「いえ、笙ちゃんがあんまりにも嬉しそうで……」

「笙之介くんは朱天が好きなの？」

「うん！ 四天のなかでも朱天が一番好きだ！」

さくらが微笑みながら聞くと、笙之介は胸を張って答えた。目を輝かせながら、笙之介は女性陣に話し始めた。

「朱天の頭領は四天のなかで一番強いんだよ！」

「へえ、どうしてわかるんだい？」

螢が聞くと、笙之介は嬉しそうにお母さんに聞いたと答える。

「お母さんが、昔若い頃、朱天の頭領になる前の陽炎に助けてもらったんだって！すつごく綺麗で、とっても強くて、優しくて…だから、朱天が一番強いんだ！」

すつごく綺麗…？ 陽炎が？ 綺麗…？ 修行と称して弟子を熊

が沢山でる山に放っておきながら、自分は麓の街で物見遊山していたあいつが？え、優しいの？ あいつが優しいなら世の中の大部分の人が優しい善人になっちゃうよ。えっへんと胸を張る笙之介を見ながら螢は、陽炎の顔を思いだし鼻で笑った。

「そうなんだ！笙ちゃんのおっかさんがねえ。朱天の頭領様はとってもいい人なんだねえ」

感心したように呟く葉奈に思わず、「そんなわけないだろ」と言いそうになって舌を噛み、一人悶絶していると、さくらが楽しそうに笑った。

「私も、朱天の頭領が一番、強いと思います！」

「そうだよな！姉ちゃん話がわかるなあ！」

「頭領の陽炎様は四天で一番強いと思います」

「そ、そうかな…」

二人の勢いに若干押され気味になっていると、急に障子が開き、話題に上っていた陽炎本人が立っていた。

「あ、かげろう…」

呆然と呟く螢の前まで、スタスタと歩き目の前に立つと思いつき右頬をはり倒された。訳が分からず呆然とする螢と、成り行きを見守っていた三人が唖然とする中、「お前は、部屋で寝てると言っ

たろうが。頭領命令だ、寝ろ」と言うだけ言っていると、「雀エー！ど

「ここにいるんだ!？」と廊下を歩き去っていった。

「……とう、りょう?」

「…はい、あれがうちの頭領ですすみませんなんか機嫌悪かったみたいですごめんなさい」

「え? 朱天の頭領の陽炎様…?」

「はいすみません」

「確かに、とつても綺麗だったけど…強い、ようだけど」

「え、綺麗ですか? あれが?」

「すつげええええかつたな! 兄ちゃん痛くない?」

「すつごく痛いよ!」

「…どうして怒っていたんでしょう?」

「今の内、日野^{ひい}さんも怒られてると思うよ。たぶん陽炎は夜勤明けで寝てないのを怒ってるだけだろうし」

「…そうなんですか」

「けんこーに煩いんだよ。少し寝なくても死にはしないんですけどね」

「兄ちゃんごめんな」

「え? なんで?」

「私たちのせい…で、寝れないじゃないですか。そうだ、ここで少し眠られたらどうですか?」

「何か、敵がきても私が見張ってますよ。少し横になったらどうでしょう?」

「今度は俺が兄ちゃんのこと守ってやるよ!」

「いや、ありがたいけど仕事中だから」

螢は慌てて応接室に駆けつけた雀が来るまで、赤くなった右頬を抑えたまま、三人に一応どういった経緯^{したた}で、抜刀騒ぎになったのか、聞き取り調査を行い、調書に認めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3909t/>

螢火

2011年12月1日18時45分発行